

# 西乗鞍古墳発掘調査現地説明会資料

平成26年11月8日  
天理市教育委員会文化財課

調査期間 平成26年9月22日（月）～11月中旬  
調査担当 天理市教育委員会文化財課 主査 石田大輔  
所在地 天理市杣之内町元山口方  
現地説明会日時 平成26年11月8日（土）13:30～15:30

## 1. はじめに

天理市教育委員会は天理市杣之内町元山口方に所在する西乗鞍古墳の保存と活用に向け、西乗鞍古墳の基礎資料を得ることを目的とした範囲確認調査をおこなっています。

## 2. 西乗鞍古墳の概要

西乗鞍古墳は杣之内古墳群に含まれ、同古墳群の南部に位置する前方後円墳です。近隣の小墓古墳、東乗鞍古墳とともに一群を形成しています。

**西乗鞍古墳の概要** 前方部を南に向けた前方後円墳で全長約118m（ただし測定部位による誤差あり）、後円部径約66m、高さ約16mあります。埋葬施設は横穴式石室であると想定されていますが、詳しいことはわかつていません。

墳丘裾部の西側には東西約20～30m、南北約130mの平坦地がひろがり、西側の道路面からの比高差は約5m以上あります。さらにこの平坦地は墳丘の北側や南側にも広がっています。この平坦地の上面は現状の墳丘裾に向かって緩やかに傾斜することから、從来から周濠が埋没した跡ではないかと考えられていました。

**調査・研究の歩み** 昭和45（1970）年に天理大学歴史研究会により墳丘の測量図が作成されました。昭和56（1981）年には奈良県立橿原考古学研究所が西乗鞍古墳の南側隣接地において発掘調査を実施しました〔第1次調査〕。この調査では、西乗鞍古墳の南・東側に周濠状の地形（外濠）が検出され、埴輪や須恵器が出土しました。また、平成11（1999）年には天理市教育委員会が墳丘西側の平坦地での発掘調査をおこないました〔第2次調査〕。この調査では、周濠の堆積と東側外堤の遺存状況がはじめて確かめられました。平成24（2012）年度にも天理市教育委員会による小規模な発掘調査〔第3次調査〕が実施されています。

### 3. 今回の範囲確認調査【第4次調査】の概要

(調査進行中のため見解に変更が生じる場合があります)

**周濠（内濠）・外堤の配置が判明** 後円部北側の第Ⅰ調査区で周濠（内濠）・外堤を検出するとともに、前方部南側の第Ⅳ調査区でも周濠（内濠）・外堤を確認しました。周濠（内濠）・外堤が墳丘の北側～西側～南側を取り囲んでいたことが推測されます。このことから、墳丘周辺に広がる平坦地は周濠（内濠）・外堤が埋没したことにより形成されたものであることが改めて確認され、墳丘本体と一体的に保存されるべき地形であることが確かめられました。

**周濠の規模を確認** 墳丘西側の第Ⅱ調査区で墳丘裾を確認しました。平成11年度第2次調査の成果をあわせると、調査地点における周濠上面幅（外堤頂～墳丘の同一標高地点）が約15m、周濠底面幅（外堤裾～墳丘裾）が約5m、深さが約1.3mであることが判明しました。

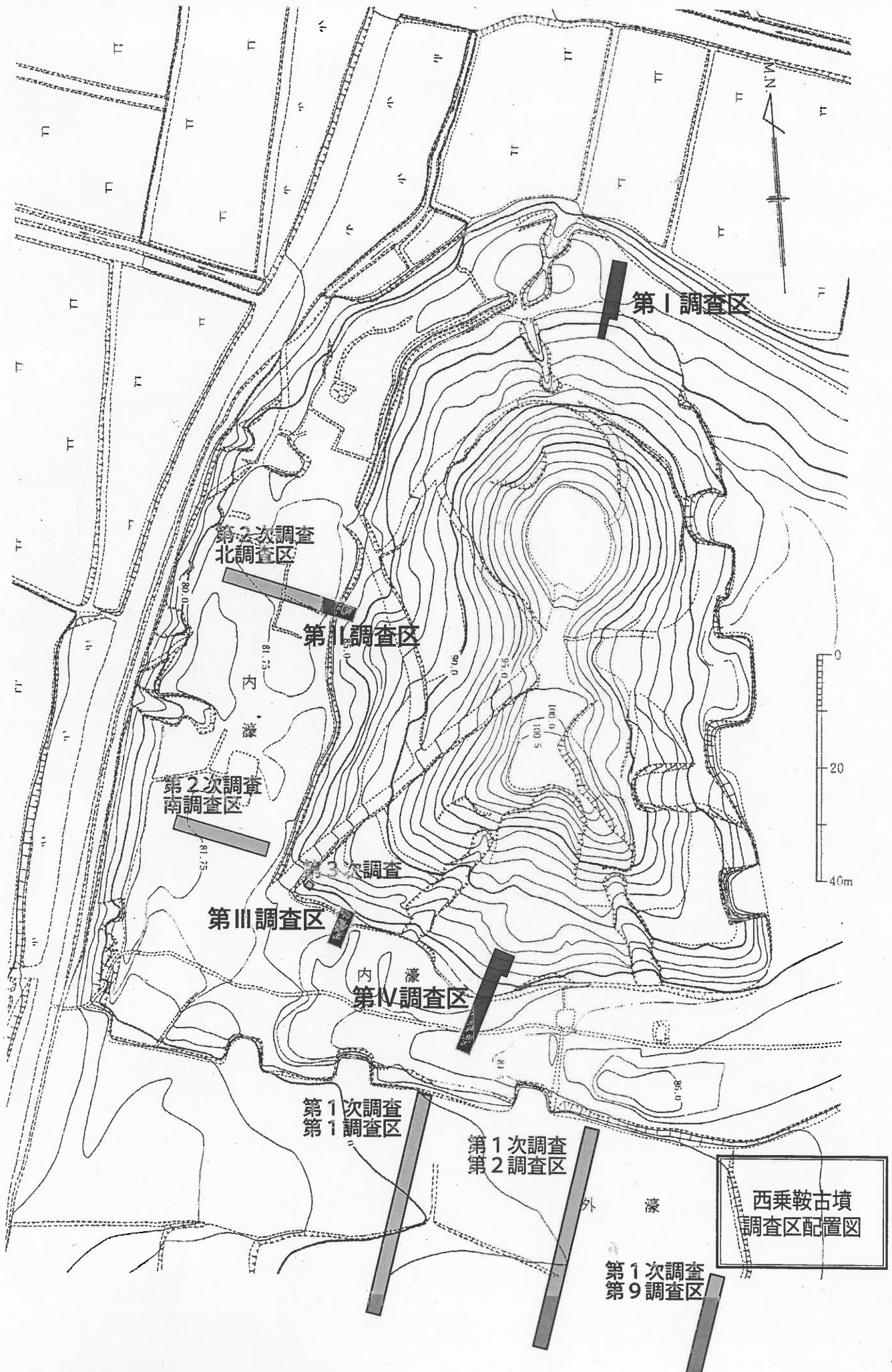
**墳丘裾の状況** 墳丘裾は後円部北側、前方部南側とも築造当時とは大きく変容しており、本来の墳丘裾は現状より内側にあるようです。墳丘の正確な規模については現在も確認を進めています。

**築造時期に関する知見** これまでの調査では、西乘鞍古墳の時期について5世紀末～6世紀前半の時期幅が考えられていました。今回の第4次調査では円筒埴輪や須恵器が多数出土しており、これらの遺物は5世紀末頃（古墳時代中期末）の特徴を示しています。

### 4. おわりに

今回の発掘調査により、西乘鞍古墳墳丘周辺の平坦地が墳丘本体と一体的に保存すべき地形であることが改めて確認されました。築造当時の西乘鞍古墳は高い外堤と周濠に囲まれた雄大な墳丘を有していたことがうかがわれます。

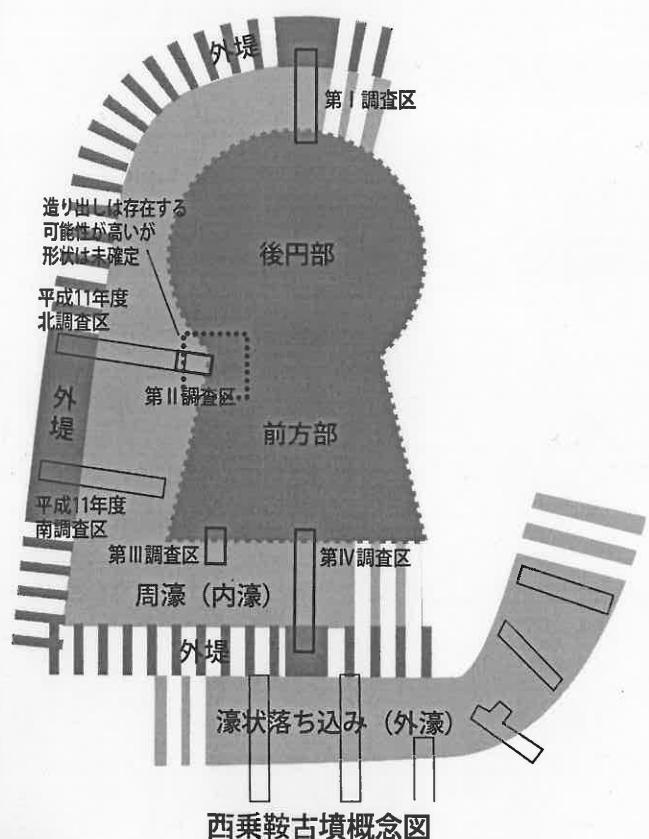
天理市教育委員会は次年度に西乘鞍古墳の精密な墳丘測量調査を実施する予定です。そのうえで、墳丘本体との一体的な保存を図るために国史跡指定に向けた手続きを進めていく予定です。





桧之内古墳群の分布

※画像等はすべて提供可能



西乘鞍古墳概念図



西乘鞍古墳周辺航空写真



西乘鞍古墳出土埴輪  
(平成11年度調査出土 高さ約72cm)



周濠内転落石検出状況（第III調査区）



周濠外堤検出状況（第IV調査区）